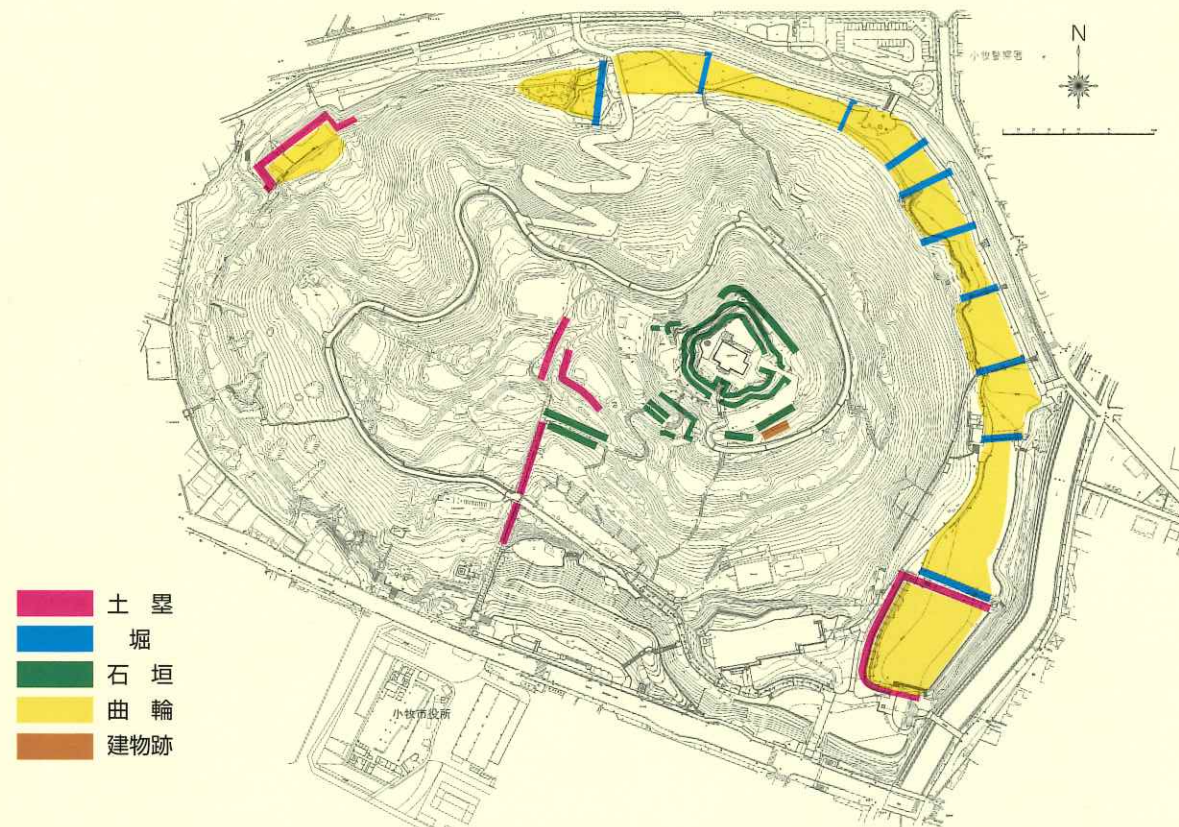
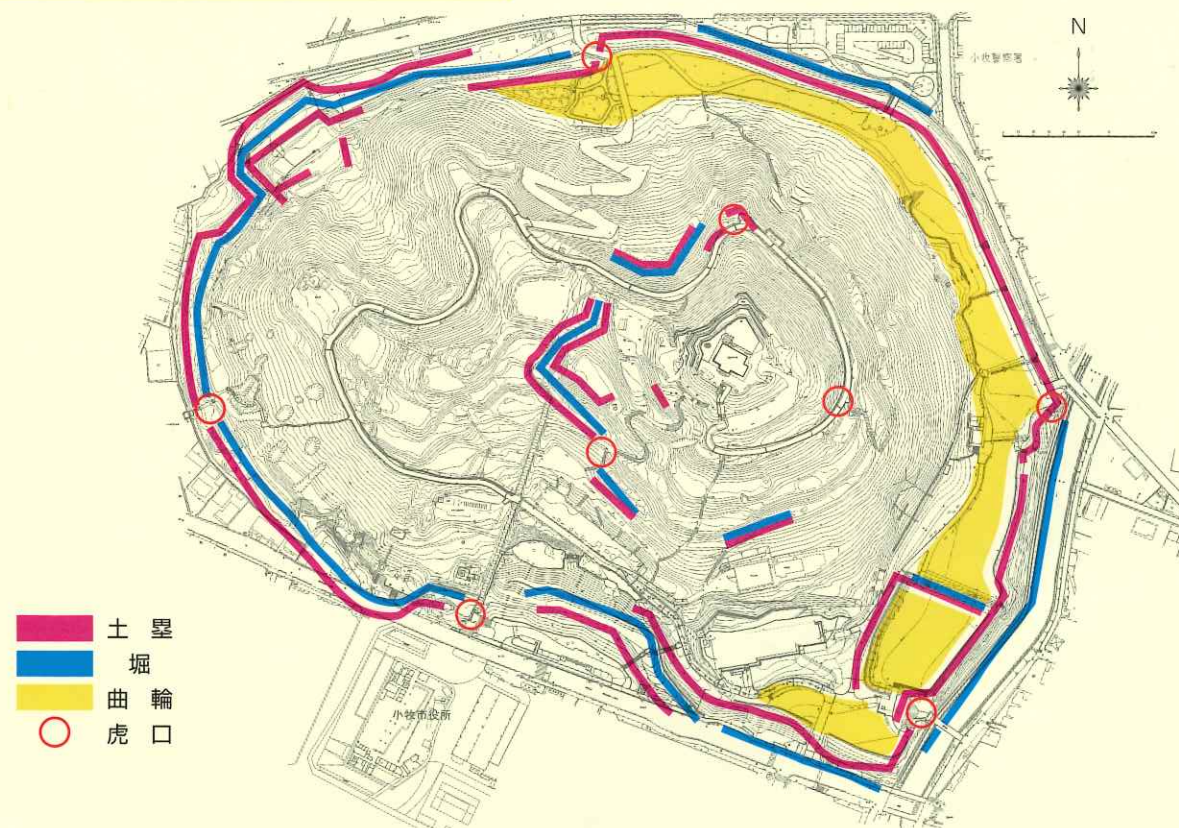


小牧山城の歴史

■ 織田信長が築城した当時の小牧山城



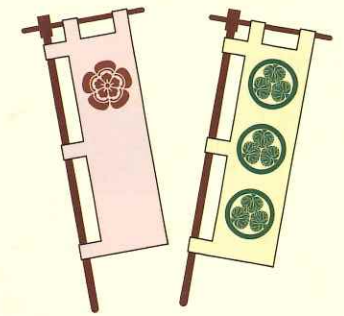
■ 徳川家康が改修した当時の小牧山城



(発掘調査の結果判明した主な部分を表示。一部、推定もあります。)

用語解説

- ・土壘^{どるい}：土を盛り上げて築いた土手・堤
- ・堀^{ほり}：敵の侵入を防ぐため、城の周囲などに掘られた溝
- ・石垣^{いしがき}：防衛や土砂どめなどのために石を積み上げて築いた垣や壁
- ・曲輪^{くるわ}：土壘、石垣、堀などで囲まれた平坦な一区画
- ・虎口^{こぐち}：城の出入口



■ 織田信長が築城した小牧山城 ～信長が初めて築いた城～

永禄3年(1560)、桶狭間で今川義元を討った織田信長は、三河の松平元康(後の徳川家康)と同盟を結び、美濃の斎藤家を次の攻略対象としました。そして永禄6年(1563)、信長は頂上から美濃方面を一望できる小牧山に城を築き、清須から居城を移しました。以前は小牧山城が築城わずか4年で廃城となったことから、美濃攻めのための一時的な砦としか考えられていきましたが、近年の発掘調査によって、小牧山に多数の曲輪や石垣が見つかり、信長が初めて手掛けた城づくりの様子が明らかになりました。また、小牧山南部には南北1.3km、東西1kmにわたる城下町を築いた形跡も見つかっています。

信長時代の小牧山で特記すべき点は、山頂を巡る2～3段の石垣です。山頂付近では「信長の館」の可能性のある礎石建物跡と玉石敷、庭園跡に伴うと考えられる玉石敷と立石などが発掘調査によって見つかっています。また、「佐久間」の文字の墨書がある石垣石材も山頂付近で出土しました。東麓の帯曲輪地区には、堀と土壘で区切られた武家屋敷があったと考えられ、井戸が見つかっています。

永禄10年(1567)、信長は美濃を攻略し、稲葉山城(後の岐阜城)に居城を移したことから、小牧山城は廃城となり、城下町も一部を残して衰えていきました。



■ 徳川家康が改修した小牧山城 ～小牧・長久手の合戦～

天正10年(1582)、「本能寺の変」で織田信長が自刃したのち台頭してきたのは、信長の家臣の羽柴秀吉でした。信長の息子の一人である織田信雄は、徳川家康と同盟を結び、秀吉に対抗しました。天正12年(1584)、家康は一万五千の兵を率いて清須城へ入り、信雄軍と合流しました。そして3月、犬山城を攻め落とし南下しようとする秀吉の軍勢に対して、家康は小牧山を本陣として秀吉と対峙しました。

家康は信長が築いた城の跡に改修を加え、陣城^{じんじょう}としました。主な改修箇所は山の中腹の堀、土壘、虎口の築造、山麓を囲む二重の土壘と堀、五箇所の虎口などと考えられます。

小牧付近では大規模な戦いは行われませんでした。5月のうちに秀吉軍の主力は小牧地区から兵を退き、家康も7月中旬には兵を引きました。11月に秀吉と信雄は和議を結び、信雄の勧めで家康も秀吉と和解しました。そして戦いの収束に伴い、小牧山城は再び廃城となりました。

江戸時代に入ると、小牧山は家康ゆかりの地として、一般の人の入山が禁止されるなど、尾張徳川家の厚い保護を受けてきました。そのため保存状態は良好で、現在でも当時の堀や土壘の跡が多く残されています。

